

第9回夏季大学参加者へのアンケートの結果

第9回夏季大学「新しい気象学」教室は、昨年8月4日から7日まで、気象庁講堂において行なわれたが、学校における気象教育特集というテーマが学生や教育関係者、とくに現場の先生方の強い関心を集め、北海道から九州まで、文字通り全国各地から例年になく多数の方が参加された。運営担当者としてはできるだけ多数の参加を願う反面、会場の都合や効果的な学習という点から止むを得ず受講申し込みをお断りしなければならなかったことは残念であった。

この講座の開催に当っては、東京都教育委員会、日本地学教育学会、および株式会社地人書館の御後援をいただき、また気象庁および東京都教育研究所科学研究部地学研究室の方々には、それぞれ会場施設、準備等でいろいろと御協力をいただいたことを感謝いたします。

これは、第9回夏期大学講座の席上行なったアンケートの集計結果で、回答者数は89名であった。括弧内は重複回答の延数である。

(I) 参加者の職業

1. 小学校教師	5人	6%
2. 中学校教師	38	43
3. 高等学校教師	24	27
4. 学生	19	21
5. その他	3	3

(II) 出席回数

1. 初めて	65	73%
2. 2回目	13	15
3. 3回目	4	4
4. 4回以上	7	8

(III) 出席の目的

1. 学校での教育のため	24 (48)	54%
2. 自分の勉強のため	36 (61)	69
3. 趣味	3 (6)	3
4. 研究活動のため	1 (1)	1
(重複)		
教育と勉強	22	25
勉強と趣味	1	1
教育・勉強・趣味	2	2

(IV) 講義の程度

1. むずかし過ぎる	16	18%
2. やさし過ぎる	3	3

3. ちょうどよい 68 76

4. 人によってまちまち 1 1
白票 1 1

(V) 講義の時間

1. 長すぎる	9	10%
2. 短い	11	12
3. ちょうど良い	67	75
白票	2	2

また、アンケートは、この他に

(VI) 今回の講座に対する意見

(VII) 今後の希望

(VIII) 講師の方の考え方に対する感想

を記していただいた。

まず、(VI)についてみると、全体的には、「気象教育」をとりあげたこと、および内容に満足しているが、部分的には不満もあげられている。その内で、特に多いものは、会場施設でのマイクの不備、テキストの活字が小さすぎること、テキストを早目にほしかったこと、費用が多少高すぎる(中には、もっと上げて充実させてほしいという意見もあったが)等である。また、実験に対する意見も多数出された。実験に対しては高く評価してはいるものの、教育の場でできるような実験をしてもらいたかったとか、能率的にできるものとか、全員が実際にできるもの等の要望が多く出された。

時期は一般的にこの頃(8月第1週~第2週)が良いようである。

次に、(VII)については、種々多様な意見が出され、関心の深さがうかがえる。

まず、この講座の運営に対して、建設的な意見をあげてみると、例えば「昼休みは1時間にして質問の時間を増したら」、「グループ討論の場を作ってほしい」、「映像をフルに活用してほしい」、「テキストにメモ欄を」、「テキスト中の用語の解説がほしい」、「5、6年間受講したら、ひととりの気象の知識が身につくように」等々である。

また、庁内見学を希望する方々が非常に多い。学会と気象庁の混同がみられるが、予報のできる現場、観測の現場、施設(風洞や検定)をみて、子供達へのみやげ話にしたいということであるらしい。

実験に関しては、この項でも意見が多く、毎回入れて
(112頁に続く)

参考文献

- 新井重男：高層風の誤差，高層気象第5巻第1号。
Hooper A.H; R.E. Vockeroth: Upper-Air Sounding
Studies, WMO Technical Note No. 140 WMO
No. 394.
北岡龍海・松山外喜男：ラジオゾンデ (S 50 L と
RS 52 M) の精度について，研究時報7巻1号。
Kurihara Y.: Accuracy of Winds-aloft Data and
Estimation of Error in Numerical Analysis of
Atmospheric Motion, 気象集誌, Vol. 39, No. 6.

松橋史郎・新井英次：極東における各国ゾンデ観測
値の比較について，天気，Vol. 7, No. 9, No. 11.
Raymond M. McInturff and E.G. Finger: The
Compatibility of Radiosonde Data at Strato-
spheric Levels Over the Northern Hemisphere,
Technical Memorandum WBTM DATAC 2,
ESSA.

Information Concerning the World Comparison of
Radiosondes (Payerne, 1956): Rec. 13 (CIMO-
II), Annex 7, CIMO Abridged Final Report,
WMO-No. 64, RP. 26.

(高層課 五月女敬太郎)

(113頁の続き)

もらいたい，教育の場で役立つものをとり上げてもらいたい，学校で自作できる観測器具の製作や講義，学校でそろえる気象実験設備の提言がほしい，等である。

今後この講座で取扱う内容については，基礎的なものと最先端のものという両極での希望が多い。学校教育上誤りやすい問題点を指摘してほしいというものや，最近の気象学(会)の動向を紹介してもらいたいといったようなものもある。また，受講者に，地学出の人が多いせいか，天文，地震，火山といったものも組入れてほしいという意見も多数あった。

今回のアンケートにのぼった今後希望する講座を術語的に列挙すると。

実験，台風，大気大循環，天気図，異常気象，地震，火山，海洋気象，高層気象，エーロゾル，衛星写真と地上実況

といったものである。

最後に，(Ⅷ)については，斎藤氏の意見への賛同，高井氏の講座への共鳴といったものの出されたが，全体的には，気象教育への方法論的内容がなく，また，現在

の理科教育の目標(エネルギーの概念，粒子の概念)からずれた講座が多く，教育の現場からかけはなれているという不満も強かった。それよりも，興味深いことは教師の方々が，気象教育に十分関心を持ちながら，それが充分になされ得ないもどかしさを記されたものが多いことである。その理由は，学校教育上気象関係が手薄であり，担当教師も地学出身が多く，専門外で，どう手をつけてよいか解りかねているのが現状のようである。その結果，学会に対して，気象実験がポピュラーになるよう，学校実験用器具の開発に関心を持ってほしい，ということや，(Ⅵ)，(Ⅶ)項に示した意見が，多かったのであろう。一般で参加されたある教育センターの方は，「指導要領は，気象学を専門としない人が作成しているので，内容に問題が多く，専門的立場から指導していただきたい」ということが述べられているが，現在の気象教育の問題点，および将来学会の気象教育に対する働きかけの必要性を含んだ概括的意見で印象深かった。

(講演企画委員 福谷 記)